法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

出土状況を通してみる漢代漆器の性格と問題点 ： 耳杯を主とする漢代の漆器は明器か否か

塩沢, 裕仁 / SHIOZAWA, Hirohito

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
79
(開始ページ / Start Page)
67
(終了ページ / End Page)
82
(発行年 / Year)
2019-09-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00022416

出土状況を通してみる漢代漆器の性格と問題点

── 耳杯を主とする漢代の漆器は明器か否か ──

塩　沢　裕　仁

はじめに

2011 年春，江西省の省都南昌市の北，淡水湖としては中国最大の面積（3210 km^2，周長 1200 km）をもつ鄱陽湖の南辺において一つの漢墓が発掘された。この発掘は盗掘を契機に行われた緊急発掘であるが，墓葬中央部に空けられた盗掘坑は幸いにして主棺槨を外れていたことから，発掘時の墓葬の保存状態はほぼ完全なものであった。以後周辺の環境調査なども含め当該墓葬に対して慎重な調査分析が行われ，主棺槨に対する発掘が実施されたのは 2015 年に入ってからであった。然るに，この主棺槨の発掘作業の一部始終はマスメディア（CCTV「探査発現考古進行時」）を通して全国に放映されることとなり，夥しい量の金銀財宝が完全な形で取り出される現場の有様が，映像として直接茶の間にいる人々の前に映し出されたのである（現在も発掘は継続中であり，現場に博物館も建設中，図 1）。その結果，中国国民全体が考古学に対して大きな関心を寄せる契機を作り出したのは言うまでもない。しかしながら，単に漢代の一般的な大型墓葬が発掘されたというのではなく，発掘経過の中で明らかにされた“海昏侯劉賀”という歴史的に重要かつ極めて異例なその被葬者の氏名，身分，生い立ち（前漢廃帝：前漢武帝の孫，昭帝が崩御したのち第 9 代皇帝となるも一か月で廃位，海昏侯とされ南昌の地に冊封）もこの報道に拍車を掛けることになった。一方，単独の番組として漸次現場にマスメディアを入れて直接情報を発信するという報道手法（発掘現場の数量・規模，並びに出土遺物の性格・質量からいって日本ではほぼ不可能）は，一般大衆のみならず中国全体の考古発掘関係者の活動をも刺激することになり，以後，各地の考古隊はより活発な発掘活動を展開することとなった。その結果として，学問的な分析・研究に耐えうる許容範囲を大きく越える情報量と資料が間断なく生み出され，情報過多の環境の中で考古学者自体が対応を迫られるという状況に陥っている。

ところで，この海昏侯の発掘中に出土した尋常ではない数量の黄金や玉器，青銅製品のほかに，注目すべき資料として，他の器物に比して出土量が極めて少ないといわれてきた漆器があげられる。整理結果に基づく出土漆器の総量は 2000 点あまり，このうち保存状態がよく識別が可能な数

図 1　江西省博物館に展示中の出土した海昏侯黄金
江西省博物館にて筆者撮影

は約1100点という驚倒すべき数量が出土したのである（後述）。漆器は木や布で胎あるいは胎骨と称する基盤形状を作り出したのち，その表面に漆を髹し色彩や装飾を施す工芸品である。したがって，時間の経過とともに徐々に粘着力を失うという漆の欠点によって表面の髹漆（漆皮）は剥離していくことになり，また胎はというとその木・布の性質から腐朽しやすい。このような点から漆器については，器形として完形の状態で発掘される事例が非常に少ないと考えられてきた。しかしながら，この海昏侯の膨大な資料が目前に現れたのを機に，中国各地の漆器の出土状況を洗い出してみると，海昏侯もさることながら，近年中国各地，特に江南地域で増加する漆器の出土量には目を見張るものがある。嘗て湖南省長沙馬王堆漢墓からほぼ生前の完全な状態を維持した女性とその副葬品，取り分け多くの漆器が完全な状態で出土したことはあまりにも有名である。その出土品を中心として中国古代漆器に関する研究は大きな展開をみせてきた。然るに昨今，その長沙市においても漢墓が続々と発掘され，より多くの漆器資料が報告されている（後述）。また簡牘資料で知られる湖北省の雲夢睡虎地や荊州鳳凰山，ならびに江蘇省の揚州においても断続的に資料が齎されるにいたった。山東でも然りである。土壌が酸性土であるから漆器の出土はないといわれることもあったが，揚州などは前漢広陵王関係の大型墓葬が次々と見つかり，考古学の現場がこれまで以上に活況を呈する（それは一面において現場研究者の過酷な仕事量の増大にもつながることになる）環境に置かれていることから，その資料の増大という現実と向き合っていく必要が生じている。ある意味望ましい状況ではあるが，許容範囲を逸脱した資料の急増という状況は，文物全体に対して求められる研究者への問題提示でもあり，取り分け漆器という文物に対してはこれまでの認識を大きく改めなければならない時期に来ているといえよう。

筆者は2019年1月から2月にかけて，南京師範大学王志高教授の紹介で揚州の博物館および考古隊における資料を見学する機会を得た。そこで膨大な量の漆器資料を目にすることになったが，特に注目したのが，揚州博物館に収蔵されている揚州市平山郷万維工地漢墓出土の一組（耳杯，案，勺）の小型の漆器（報告書が未刊であるためこの場での測定数値の掲載は避ける）で，実用品とは言い難いミニュチュア製品である。そこで問題となるのが，これらが明器であるか否かという点である。明器とは何かというに，専ら副葬を目的として作成された産品である。“冥器”あるいは“盟器”とも称し，礼器・工具・兵器・日用品のほか，人や動物，車や船，建築物などを真似て制作された模型である。材質は陶器，磁器，竹や木が主であり，金属や紙のものもある。最も早い時期のものとしては新石器時期の墓葬から出土している。殷周時期には青銅礼器を模した陶質の明器が一般的であり，秦漢時期においては明器の種類と数量が著しく増え，陶質の明器は更に流行した。三国時代以後になると青磁の産品が，また唐代には三彩の産品が出現し，以後歴代の墓葬からは等しく出土している。明器は中国古代の社会生活と彫塑芸術を考える上という点で価値を有する考古遺物であると認識されるものである[(1)]。では，墓葬から出土する漆器は明器であろうか。ここで問題にするミニュチュアが明器であるか否かという問題とともに，副葬される古代漆器は明器か否かという問題も，曖昧な理解の中で研究されているといわざるをえない。海昏侯をはじめとして昨今の出土状況をとらえつつ，この問題に対する認識のあり方を検証するところに本論の目的は存する。

一　近年発掘された注目すべき遺跡および漆器資料の状況

漢代漆器の器形は極めて多岐にわたる。これらは鼎・鍾・鈁などの青銅器を模した礼器，盾や剣鞘などの兵器，漆棺・木俑・木馬などの葬祭用具などに分けられるが，数量・器形とも最も多いのが什器，すなわち生活用具（瑟などの楽器，六博

などの娯楽用品，砂硯などの文房具を含む）である。器種としては，壺（圓壺・扁壺），樽，卮，耳杯，盒（耳杯盒・食器盒・圓盒・長方盒・双耳長盒），笥，盂，案，盤（長方盤・圓盤），碗，匕，勺，俎，魁，匜，奩（圓奩・楕圓奩・長方奩），梳，篦，盆，凳，枕，虎子，几，案などがあげられる。この中で圧倒的な数量を有するのが耳杯である。これに次ぐのが盤，そして収納用具としての盒・奩などである。耳杯はその数量も然ることながら中国全土で隈なく出土し，かつ漆器に止まらず玉制，陶質，鉛錫など様々な素材のものがみられる[(2)]。然るに，耳杯として圧倒的な数量を有する出土品の素材は何といっても陶質であり，三国以降は青磁のものがこれに加わる。筆者が中国各地の博物館・考古隊収蔵庫などで目にしてきた大多数のものは，この範疇に属する耳杯である（図2）。これらは盤などの陶器とともに出土することから，副葬することを本来の目的として特別に制作された産品，すなわち上述した明器であるという認識でとらえてきた。それ故に，形状が全く同一であり，かつ数量的にも希少な漆耳杯も同様な認識の範疇でとらえており，さほど注意してみていたわけではない。然るに，漆器，とくに耳杯の出土資料が増加したことで，実生活の中で耳杯はどのような位置づけにあり，かつ如何なる材料で制作されていたかという問題が浮上し，髹漆および陶質の耳杯が如何なる意味において制作されたかという点を再確認する必要が生じた。

図2　陶質の耳杯と盤
甘粛省博物館にて筆者撮影

よって本章では，中国における古代漆器の研究の現状を踏まえ，近年の発掘において特記に値する漢代の墓葬から出土した漆器，その中でも圧倒的な数量を有する耳杯に注目しつつ，発掘状況の確認とそこから得られる副葬品としての扱いを考えていく[(3)]。そしてそれらの漆器を明器としてとらえることができるか否かという問題を論じるための前提資料を整えていきたい。

1. 湖南省長沙馬王堆の出土品と出土状況

1号墓は1972年，2号墓と3号墓は1973年に発掘されている[(4)]。漢代の墓葬として完全な状態で発掘された最初のもので，漆器に限らずその出土品の研究は中国考古学，歴史学，美術史など多岐にわたる分野で展開されている。保存が良好であったのは1号墓と3号墓であるが，3基とも漆器は出土しており，その総数は700余点，1号墓が184点，2号墓が200余点，3号墓が316点である。1号墓出土の漆器は漆棺の外側，東・北・南の3つの箱に収められており，耳杯が90点，盤が30点という状況である。被葬者の保存状態や漆器以外の出土遺物からも一般に注目されるのはこの1号墓であるが，漆器の出土数からみるにむしろその半数を占める3号墓に注目する必要がある。

3号墓は墓道を有する甲字型竪穴墓で，槨室（2.61 m×1.22 m）の四辺に等しく辺箱（南辺箱：0.41 m×2.87 m，北辺箱：0.94 m×2.87 m，東西辺箱：0.62 m×2.63 m）をもつ。3号墓出土品の総数は1000余点，そのうち，漆器は316点（髹漆の兵器，楽器，遊具を除く）と約3分の1を占め，それらは4つの辺箱から等しく出土している（図3）。このうち最も数の多いのが耳杯で174点，これは同墓葬出土の漆器総数の半分を超える。これに次ぐのが盤の68点である。特徴としては，15点ある漆奩のなかで双層奩が5点，なかでも1号墓にはみられない長方形双層奩が2点（東辺箱，北辺箱）出土していることがあげられる。また南辺箱では大小6点の漆盤（うち5点は平盤）が出土しており，最大の盤は直径73.5 cm，高さ

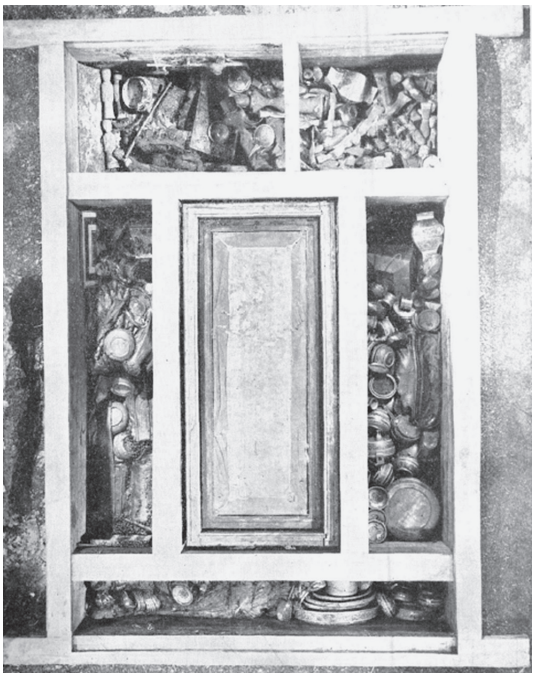

図3　長沙馬王堆3号墓

湖南省博物館・中国科学院考古研究所「長沙馬王堆二,三号漢墓発掘簡報」『文物』1974年第7期，より転載。

13 cmもある。兵器も1号墓にはみられない。

1・3号墓の500余点の内，300点余りに朱砂あるいは黒漆にて文字が書かれている。その内容は「軑侯家」という所有者，「君幸食」「君幸酒」という用途，「石」「斗」「升」という容量の3種類である。また100点ほどには「成市草」「成市飽」「中郷飽」「南郷□」などの烙印戳記がみられる。因みに，2号墓では200余点中の70余点が盤である。

馬王堆漢墓では器種に漆鼎（1号墓7点，3号墓6点）などの漢代初期の特徴である礼器を含んでいるが，その他の器物は日用品である。なお，3号墓では陶器の出土が報告されていない。

2. 江西省南昌海昏侯の出土品と出土状況

はじめにでも触れたように，その被葬者たる海昏侯劉賀そのものが数奇な運命を辿った歴史的に稀有にして重要な人物である。墓葬は発掘時高さ7 mの覆斗型の墳丘を有しており，墓穴は“甲”字型の方形木造槨室（面積400 m^2）をもつ。槨室の中央に主槨室があり，その周囲に回廊形の蔵槨と甬道を配している。主槨室（6.9 m×6.7 m×2.4 m，蔵槨より0.6 m突出）と蔵槨との間には過道が設けられ，これによって両槨は隔てられている。主槨室は漢代の王族墓が用いる題湊の構造をもち，中央部に門を有する隔壁で東西に仕切られており，東室は幅3.7 m，西室は幅2.9 mである。槨柩（3.71 m×1.44 m，残高0.46～0.96 m）は東室の東北部に置かれている。これにより主槨中央部に盗掘坑が掘られても盗掘を免れることができた。東蔵槨は北より酒具庫，厨具庫（“食官”庫），西蔵槨は北より衣笥庫，武庫，文書档案庫，娯楽用器庫，北蔵槨は東より酒具庫，楽器庫，粮庫，銭庫と区分され，南側両側面は車馬庫となっている。2011年から5年をかけて調査整理された面積は100万 m^2（内発掘面積は1万 m^2）で，金器，青銅器，鉄器，玉器，漆木器，紡績器，陶磁器，竹簡・木牘など約1万件におよぶ遺物が出土している。中でも漆木器の出土点数は従前の比ではなく，2000点余，そのうち器形の識別が可能なものが1100点余，器種も飲食用器，生活用器，兵器関連用器，楽器関連用器など多岐におよびその大多数が実用器であり，それらの胎骨は木胎と夾紵胎とに大別される。本論で注目する耳杯の出土点数も567点と桁外れに多いが，特記すべきはその大多数に銘が記されてあり，それにより御酒杯（3点），曹耳杯（301点），李具杯（大121点），李具杯（小127点），素面杯（15点）の5種類に分けられる。記銘の内容は以下のようなものが報告されている。

①器物の所有者および製作者：「李具」「張氏」「龐氏」「昌邑」「安武曹」「大所曹」「郭野曹」「荘曹」「曹」

②器物の名称，功能，数量，大きさ：「緒銀椀十枚」「緒銀六升盤五十枚」「医工五，約湯」「医薬」「酒杯御酒」「御酒杯」「甲子」「五」

③祝福や訓戒：「食官慎口」「御酒盤，慎毋言」「名曰寿驩，御酒承盤此聚完，日楽無患」

④制作に係る情報記録：「第一，卅五弦瑟，

禁長二尺八寸，高七寸，昌邑七年六月甲子，礼楽長臣乃始，令史臣福，瑟工臣成，臣定造」「私府髹木笥一合，用漆一斗一升六籥，丹臾丑布財用工牢，并直九百六十一，昌邑九年造，卅合」「私府髹丹木笥一合，用漆一斗二升七籥，丹猶丑布財物工牢，并直六百九十七，昌邑十一年造作，廿合」

漆を用いて記された文字は比較的に趣があるが，針線で刻された文字は決して達筆とはいえない。報告者が認識するように当該墓葬出土の漆器は実用の飲食器であり，このような文字資料の研究も後述の工房や工人を論じる上での極めて重要な資料として今後に期すところ大である。発掘は継続中であり，整理・保存作業も継続中であるが，筆者は2019年3月現地考古調査の総顧問でもある陝西省考古研究所元所長焦南峰氏の紹介により復旦大学文博系の院生とともに現地を見学する機会を得た。黄金・玉・青銅器などの出土遺物は南昌市にある江西省博物館（新館建設中）に保管され，一般の観覧に供されているが，その保存管理が難しい漆木器のみは現地に設けられた専用施設の中で厳重に管理されている。すでに保存処理されたものについては『文物』2018年第11期の中で紹介されているが，それはあくまで出土品の一部であるとはいえ，その工芸水準の高さは空前のものであることが分かる。収蔵庫内では，高さ0.6～0.8 mもあろうかという漆盾十点余が復元されていたが，そのミニュチュアを西安にある漢景帝の陽陵博物館で目にしていた筆者にとって，それは圧巻のものであった。膨大な量の文物に係る個別の情報については上掲『文物』（漆木器の前後の章には銅器と玉器の報告が掲載される）ならびに今後出版されるであろう報告書を参照されたい。なお，明らかに葬祭用品として認識される木俑（髹漆されているものを含む）については210点という数が報告されている。

3. 湖南省長沙望城坡漢代墓葬の出土品と出土状況

長沙というと上記の馬王堆漢墓の知名度が突出しているが，市内では馬王堆以外にも陡壁山漢墓や象鼻嘴山漢墓など重要な発掘が行われていることは意外に知られてはいない[5]。然れども，この2つの漢墓以上に筆者が注目しているのが，市内西部，湘江西岸咸嘉湖の西側丘陵の頂部で発見された望城坡前漢漁陽墓である。この墓葬は1993年に発掘されたものであり，主墓葬は西向きに傾斜墓道を有する甲字型の竪穴式岩坑木槨墓で，その構造は上述の海昏侯漢墓とほぼ同じ題湊である。墓坑は長方形で11.6 m×9.76 m（底部計測値），その中にさらに長方形の外槨室（7.4 m×5.7 m×3 m）が収められている。外槨室の内部は西側に前室，中央部に内槨（主槨）を配し，南蔵室，東蔵室（中央部に隔壁をもつ），北蔵室が主槨を回廊状に取り囲んでいる（図4）[6]。

漢代に2回，唐代に1回，盗掘されているため，副葬品の位置は若干移動しているが，槨室内で確認された副葬品は非常によい保存状態にあった。したがって，金器や玉器も相当数出土している。然るに，当該墓を以て議論すべきはその漆器の品目（耳杯，盤，盒，盂，壺，卮，匜，案，几，匕，磬，排簫，琴，瑟，筑，陸，博，硯盒，奩盒，具杯盒，傘，杖，方器座，俑）と数量である。180余点の盤，170余点の卮，125点の盂も特記に値するが，2500余点という海昏侯を凌駕する耳杯の数量には圧倒される。報告書では文様などによりそれらを4分類しているものの，記銘

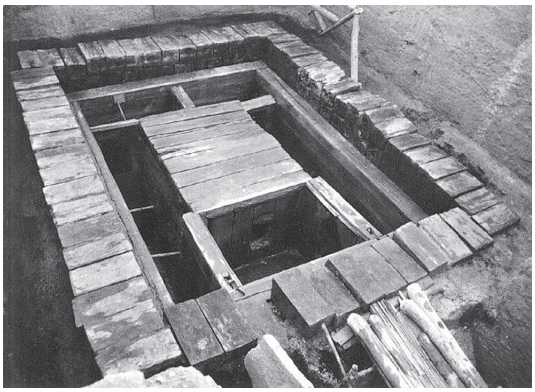

図4　長沙望城坡前漢漁陽墓

長沙市文物考古研究所・長沙簡牘博物館「湖南長沙望城坡西漢漁陽墓発掘簡報」『文物』2010年第4期，より転載。

などの分類整理に関しては何も記されていない。

また，主墓葬から若干離れた位置にあってそれを取り囲むように東西南の三面に外蔵坑が設けられている。2号外蔵坑以外は比較的保存状態もよく，1号外蔵坑からは鼎・盒・瓮・大口罐といった陶質器物が，3号外蔵坑からは100余点におよぶ陶質鳥獣俑が出土している。これに対して，上述の主墓葬には実用品と認識すべき漆器が収められており，それを模倣したような陶質器物もみられない。これによりこの墓葬では葬祭品と実用品とを明確に区別して埋葬していることがわかる。3000余点の出土品中，大多数が耳杯を含む漆器であり，それらのほとんどがまた日常生活に用いる什器である。さらに20点におよぶ漆楽器の出土も古代音楽史を考える上に注目されるところである。これらの点も含め当該墓葬出土品研究に対して今後に期すところは大きい。

4. 湖北省漢代墓葬の出土品と出土状況

湖北省では雲夢睡虎地のほか，江陵鳳凰山などで簡牘研究上の重要な発見がなされてきた。然れども，そこから大量（1000余件）の漆器資料が出土している点については，簡牘研究の陰に隠れてしまった感は否めず，注意が欠けていたといわざるをえない。近年，保存工学などの分野で湖北省の漆器保存処理法が注目されており，当該地域の漆器の資料性が再認識されるに至っている。ここでは，江陵鳳凰山167・168号漢墓（図5）および同8・9・10号漢墓を代表として湖北地域，すなわち長江中流域における漢墓の漆器出土状況をみておきたいと思う[7]。なお，当該地域では中小墓葬の発掘が中心で，未だ諸侯王級の高級墓葬の発掘は行われていない。また，戦国楚・秦の資料の出土数も多く，むしろ漢代よりも戦国・秦の資料に対する研究がメインになっていることも付記しておきたい。

鳳凰山167号墓は墓道をもたない1槨1棺の土坑木槨墓である。槨室（4.52 m×2.76 m×2.15 m）は棺箱，頭箱，辺箱の3部分からなっている。辺箱には随葬車（0.6 m×0.39 m）と木俑（24点）

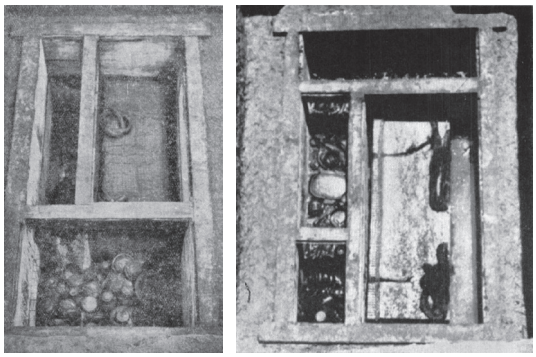

図5-1，5-2　江陵鳳凰山167・167号漢墓

紀南城鳳凰山一六八号漢墓発掘整理組「湖北江陵鳳凰山一六八号漢墓発掘簡報」『文物』1975年第9期，一六七号漢墓発掘整理小組「江陵鳳凰山一六七号漢墓発掘簡報」『文物』1976年第10期，より転載。

が，頭箱には漆器（95点，うち耳杯が61点と3分の2を占め，盤10点がこれに次ぐ），陶器（13点，罐が5点，瓮が2点のほか倉，灶などは各1点），絹織物（35点）が収められている。漆器が圧倒的に多く，陶器はそれほど多くはない。報告書では陶器について明器と記すものの，漆器についてはその性格を記していない[8]。

168号墓は墓道を有する1槨2棺の竪穴土坑墓で，槨室（4.29 m×3.14 m×1.55 m）は167号と同様の棺箱・頭箱・辺箱の3部構造である。木器（120余点，うち木俑61点，木馬10点など）は頭箱に，漆器（160余点）と陶器（18点，罐・瓮・倉・灶など）は辺箱に収められている。漆器では耳杯が100点余とここでも3分の2を占める。その他，盤26点，盂8点，盒6点，壺4点などである。この報告でも，陶器については明器と記されている[9]。

このほか，鳳凰山8・9・10号（槨室の構造は167，168号と基本的に同じ）でも漆器が260余点出土している。耳杯が168点と3分の2弱を占め，このほか盤が41点，奩が18点，盂が12点，壺が8点などとなっている。この報告で注目されるのは，4点出土している漆盾に対し，報告者が明器ととらえていることである。耳杯など他の漆器については特段触れていないことから，明器としては認識していないと思われる。一方，陶器も

70 点ほど（倉 3 点，灶 4 点，釜 7 点，鉢 9 点，罐 16 点，壺 26 点など）出土しているが，これらについては，その大多数が明器であると認識している。しかし，大多数から何を除外しているかは明確でない[10]。

鳳凰山漢墓の報告書に共通しているのは，陶器を明器と認識しているものの，漆器に対してはその認識を示しておらず（日用品との認識か？），明器や木器に対する認識が曖昧（意図的かは不明確）である。然れども，当該地区の秦代小型墓葬から出土する漆器の特徴として，生活実用品が顕著であり，漢代においてもこの状態は引き継がれ，やはり生活実用品が主であることが指摘されている[11]。上述の出土状況から捉えるならば，漆器と陶器とは収納される場所が異なっており，両者は区別されるべき性格のものであり，漆器についていうならば，葬祭専用産品という認識からは外れていると考えるべきである。

5. 江蘇省・安徽省における漢代墓葬の出土品と出土状況

江蘇省で注目されるのが揚州出土の漢広陵国関連墓葬からの出土品，並びに盱眙大雲山漢江都国墓葬からの出土品である。漢代呉楚七国の乱の中心地であり，大量の漆器資料が出土している。この地域の土壌の性質は酸性土であることから，量の多さだけでなく漆器の地中残存状況に対しても再認識をもたらす研究上重要な資料群である。

まず，漢広陵国墓葬に係る揚州地域の重要発見をみていく。揚州地域では，20 世紀中葉以降 1000 基に近い（その大半は今世紀に入ってから）漢墓が発掘されており，副葬品に占める漆木器の比重は極めて高く，その数量も 1000 点をはるかに超えている。この地域で注目できる墓葬として，東風磚瓦廠前漢墓群，邗江西湖胡場前漢墓，邗江甘泉姚荘前漢墓，邗江寿宝女墩前漢墓などをあげることができる。漆器の器種も豊富で，武器を除くと楽器・文具・娯楽用品や酒食器を含めた生活用品が大半を占めるが，ここでも耳杯が代表的でその数量も突出している。耳杯の長径は一般に中等耳杯で 14 cm 前後，大耳杯で 16 cm 超，小耳杯で 11 cm 前後であるといわれるが[12]，当該地域出土品では，その長径が 30 cm～7.5 cm と規格に大きな幅がある。揚州博物館の分析によると，このことが当該地域漢墓出土の耳杯の特色であるとされる。また，副葬品の総数に占める漆器の割合の高さ（邗江甘泉姚荘前漢墓 101 号：出土品総数 250 点中漆器 131 点，東風磚瓦廠前漢墓群 1～9 号：出土品総数 252 点中漆器 102 点，邗江西湖胡場前漢墓 1 号：出土品総数 126 点中漆器 70 点など）も特徴としてあげられている[13]。この他，邗江寿宝女墩前漢墓の出土品（考工・供工・広漢郡工官の 3 工官銘，および銘文は最長 50 字）の記銘研究については，他地域出土の記銘内容との関係を視野に入れた研究の展開が期待される。

揚州各墓葬出土の膨大な数量の漆器資料は，文物保護の視点からも重要な資料であり，現在補修保護管理の実験対象として揚州博物館および揚州市文物考古隊収蔵庫内で継続的に整理が実施されている。なお，当該地方特有のものとして漆面罩があげられるが，これは葬祭専用産品である。

2009～12 年にかけて，盱眙県の東部にあたる馬壩鎮雲山村の大雲山山頂から江都王の墓葬が発掘された。主墓葬は 3 基（M1，M2，M8），陪葬墓 11 基，陪葬坑 2 基，兵器陪葬坑 2 基，並びに陵園建築施設が見つかっている[14]（図 6）。M1，M2 は覆斗形墳丘をもつ同塋異穴の中字型墓であ

図 6　江蘇大雲山漢墓

南京博物院盱眙県文広新局「江蘇盱眙大雲山江都王陵二号墓発掘簡報」『文物』2013 年第 1 期より転載。

る。墓室は主室（4.7 m×3.9 m），北室（3.9 m×2.5 m），南室（3.9 m×2.4 m）の3つの部分からなる。南北室とも明器漆木車馬2基を入れる。玉棺と称される髹黒漆木棺がみられ，その棺の四面に辺廂（東西辺廂：2.7 m×1.1 m，南北辺廂：3.9 m×1.0 m）が設けられている。漆器は奩（七子小套）・盤（27点）・耳杯（28点）など61点が出土している。当地でも継続的に発掘が続けられており，博物館も建設中である。その出土物は現在南京博物院が管理しており，一部が展示されているにすぎない。今後その膨大な資料が公開されることを期待したい。

なお，安徽省において漢広陵国の領域に属する江蘇省との境界区域で二つの重要な発見がなされている。一つは天長市にあり，江蘇省の揚州・盱眙区域につながる漢代の墓葬区である[15]。もう一つは南京の南側に隣接する馬鞍山朱然墓で，後漢末三国の重要な資料が出土している[16]。後者は青磁の耳杯が本格的に普及し始める時期との結接点に当たる。家族墓葬であることから，副葬品の埋葬状況は互いに比較しやすい。他の墓葬は陶器が多いのに対し，朱然墓のみ漆器と青磁を出している。筆者は2019年1月，南京市博物館王涛氏の紹介で収蔵庫にて直接資料を閲覧する機会を得たが，朱然墓の漆器の装飾は極めて繊細なものであることから，生前の生活の中で愛用していたものと考えている。

漢楚王陵で知られる徐州諸王陵については2019年1月に調査を行った。規模の点では他の地域を圧倒しており，議論の場に出す必要が指摘されよう。確かに，漆皮と玉壁などの残存片から玉（漆）棺の存在が知られている。しかしながら，確認された完形漆器の出土総数は意外と少ないことから本論では敢えて割愛した[17]。

6. 山東省臨沂金雀山・銀雀山，日照，青島土屯漢代墓葬の出土品と出土状況

山東省では漆器を出土する墓葬の存在が比較的早い段階から知られていたが（臨沂の金雀山・銀雀山漢墓[18]），本論では紙幅の関係上，近年新たに報告書が刊行された日照漢代墓群と，2017年に青島にある秦琅邪台の近くで発掘された土屯漢代墓群（調査は2011年から開始）について触れるに止める。

図7　山東日照海曲前漢墓

山東省文物考古研究所「山東日照海曲西漢墓（M106）発掘簡報」『文物』2010年第1期より転載。

日照海曲前漢墓は日照市の西郊堡村西南にあり，その東南には漢代の海曲県の城址がある。高速道路建設に係る緊急調査の際発見されたもので，86基が発掘され，そのうち106号（M106：長方形竪穴土坑，5.7 m×3 m×6.5 m）墓が比較的に規模も大きく出土遺物も豊富である[19]（図7）。ただしその規模も題湊をもつ王侯級のものと比較すると見劣りはする。盗掘坑はあるが盗掘者が侵入した形跡はなく，保存は完全であった。墓葬は一棺一槨で，木槨は井字型（4.04 m×1.2 m×0.86 m）である。槨内は木板を立てて仕切りとし槨室，頭箱，足箱に分けられている。棺は漆棺髹（2.12 m×0.76 m×0.76 m）でその表面には黒褐色漆を髹し，内側には朱漆を髹する。発掘時棺内は

水で満たされており，中には漆器，竹杖，木杖，銅鏡，玉璧，瑪瑙珠など大量の副葬器物が納められていた。頭箱内には2点の漆木箱（内に漆器，銅灯，竹筒を納める）があり，足箱内にも1点の漆木箱（内に木器を納める）がある。また木槨外北側には辺槨（2.87 m×0.56 m×0.6 m）が作られており，その中にも大量の陶器，銅器，漆器が置かれていた。全体としてみると圧倒的に漆器が多く，棺内，頭箱，足箱，辺槨内に分置されていた。この墓葬で特記すべきが陶器で，大部分（壺，罐，鼎，尊，盆など）が漆衣陶であるのに対し，案（1点）・耳杯（7点2分類）・器蓋（3点2分類）など本来漆器としてみられる器物が陶質である。当該墓葬から出土した漆器の器形については盤が5点，七子奩（1套8点）が2点のほか，長方盒，双層五子奩（1套7点），方盒，嵌金圓梳盒，小方盒，圓奩，盤，卮形杯，耳杯，硯盒はすべて1点ずつであり，また琴弦柱（23点），器蓋（1点），梳（15点），篦（12点）などの木器もあり，これら漆木器のすべてが日常の生活の中で用いられた器物であると理解すべきである。ただ，漆耳杯が1点しか出土しないというのは気になるところであり，その一方で，他の墓葬で併用されることのない陶質耳杯が7点もみられる点には注意が必要である。実用品として満足すべき数の漆耳杯を揃えられなかったことから陶質器物によってこれを補ったという見方も成立しうるのではなかろうか。

2018年8月，筆者は復旦大学文博系が実施した山東青島考古隊への現場視察に同行し，青島土屯漢墓の現地環境と出土品を観察する機会を得た。青島市の西南に位置する胶南市の大型幹線道路の建設に伴って実施された緊急発掘で13基の墓葬が発掘されている（2011年には漢墓13基，2016～17年には新たに漢墓125基）。然るに上述の海昏侯漢墓同様，CCTVによる現場放映が実施されたため，その知名度は極めて高い。現地はすでに埋め戻してあり，出土遺物は考古隊にて管理されているという状況にある。この墓群で注目されるのが，6号墓（M6）と8号墓（M8）および近傍の廒上村1号墓（M1）である[20]。

M6は甲字型の同冢同穴双室墓である。一号棺からは銅器，鉄器，玉器，骨角器のほか漆器としては奩が，木器としては木梳，木棍，木印が出土している。また二号棺からは漆器として方盒，罐，楕圓形盤，鞘のほか漆木梳6点，漆耳杯1点，漆圓盒1点，七子圓奩1点（1套8点）が出土している。

M8は甲字型の竪穴岩坑磚木混槨墓である。内外二重の棺槨であり，内棺は髹黒漆で，七子圓奩が1点（1套8点），銅器が8点確認されている。器物箱は2 m×0.6 m，西側では漆耳杯が11点，漆樽が1点，東側では陶質罐が4点，原始磁器壺が2点確認されている。その他，木梳，篦，木棍，木方，木牘，角器などが出土している。漆器と陶磁器が分けられている点に注意が必要であり，前者は日用品，後者は葬祭専用器物として区別されていたと考えられる。

M6とM8は五銖銭などの出土品から前漢晩期から後漢早期と考えられており，出土漆器については魯東南沿海地区の同時期木槨墓出土品との類似性とともに揚州・連雲港一帯の前漢中晩期の木槨墓出土品との類似性も指摘されている。

廒上村1号漢墓では，漆衣陶壺1点，原始青磁10点，銅器，玉器，角器などの出土品のほか，漆器関係では七子圓奩が1点（1套8点），漆盤2点，漆樽2点，漆案が1点，そして漆耳杯が26点確認されている（残片として漆案足2点，漆蓋1点，漆楽器2点もある）。

以上，保存状態が比較的良好な漢代の大型・中型墓の出土状況，出土品を通覧してきた。そこにおいて，副葬品の中でも漆器，就中耳杯の数量は金属器・玉器・陶器など他質の器物に比して格段に多く，また棺槨内の収納空間にも特徴が見出された。それ故に，副葬される他質の器物とは異なった位置づけ，認識をもって漆器という器物の性格は議論されなければならないことが理解されるのである。

二　明器という器物の理解について

本章では，明器とは何かという理解，そして出土状況などからみて漆器を明器の範疇でとらえることができるか否かという点を考えていきたい。

先に示した明器に関する理解は王巍総主編の『中国考古学大辞典』によるものであるが，日本における当該問題への理解はというに，研究史をみると濱田耕作の「支那古明器泥象図説総論」に示される「墓中に生前所用の器玩を瘞め，奴隷其他近親の者を殉葬することは，古代諸国に最も普通の現象にして，支那に於いても古くより此の風習ありしものの如し。此の副葬の器玩にして特に調達せられたるものを明器或は凶器と謂ひ，人畜の生物に代ゆる造像を埴象と名づく（特に人物を俑と言ふ）」が基本になっているとみてよい[21]。

また，岡崎敬は明器について，『世界考古学体系』（第7巻）[22] において「明器の発達」と題して具体的な出土品を交えて詳述し，長安（陝西）・洛陽（河南）を中心とする出土遺物について，①鍾鼎，②家屋器材，③人と動物，という類型に分けている。③に係る人馬の俑には，土俑，木俑，金属（鉛・銅）俑があり，時代が下るほどに陶製品が用いられるとする。前章にて触れた王侯貴族墓にみられる人馬の木俑は漆木器であるが，これも専ら葬祭に供される目的において制作されたものであることから，この範疇でとらえられるものである[23]。岡崎の指摘で注目されるのは，①に関して“鍾，鼎，盉，奩”は「銅器を模したもの」，②に関して“盤や耳杯”は「もともと漆器であったもの」，換言するならば「漆器を模したもの」であり，陶質用器を以て代用品としたものと捉える点にある。②についていえば，倉，灶，家屋，家畜小屋などの陶質器物はこの認識の範疇には入らない。

では，陶芸の視点からは如何に捉えられているかというに，陶製明器は鼎・敦・盤・匜は銅器をまねたもの，杯・盤・案・勺などは漆器をまねたものと捉え，装飾が繁縟なものからつくりが粗末で質も悪いものがあったという[24]。そして関中（陝西），関東（河南）の地区を中心に論じ，出土状況にもとづく関東の漢代陶器の器形を①罐・鼎・敦・壺，②倉・竈・井戸・炉，③盒（盤）・案・杯（耳杯），④家畜（鶏・犬・豚・羊）・圏舎・住宅・城堡という4グループに分け，①は仿銅礼器，②は生活用器，③は祭器模型，④は動物・建築模型とし，特に③については，はっきりと漆器仿製の要素をもち漢代の厚葬の風俗を反映したもの，との見解を示す。すなわち，陶器はすべてにおいて模型・模倣品という理解である。

上記諸方面での理解に基づくならば，陶器は生物や建築の模型だけでなく，銅器や漆器の代用模倣品である。前者は明らかに葬祭に供されることを目的に制作された器物であるが，後者は元々祭祀や日常の生活に用いられることを目的に制作された器物である。まさに漆器は日常の什器である。しかも単なる什器ではなく高級什器であるという。では，何を以て高級品というのか，その論拠は何処にあるのか。この点を論じる材料として最初に用いられたのが20世紀初頭に朝鮮半島の平壌から出土した楽浪漆器である。

漢代の漆器生産に係る著名な区域は，蜀郡，広漢，河内，河南，南陽，済南，泰山，潁川，武都などの地方郡が知られており，中でも蜀郡・広漢が銘記された産品の多さは際立っている[25]。漆器表面にはこのような産地ばかりでなく，分業工程を理解することができるような素工，髹工，上工，黄涂工，画工，丹工，清工，造工などの名称も銘記されており，その分野の研究は現在中国国内においても活況を呈している。この点早くから注目されていたのが楽浪漆器資料群であり，これを用いた梅原末治，佐藤武敏，町田章などによる研究成果の蓄積がある[26]。就中，研究資料として高く評価されているのが梅原末治の『支那漢代紀年銘漆器図説』である。漆器の表面に針刻や朱黒漆で記された銘文により，制作工程や工房管理の状況を捉え，以て漆器が今日の一般家庭で使用されるような日用品ではなく，官府の管理を受けるような皇帝諸侯用の高級什器であったことを明

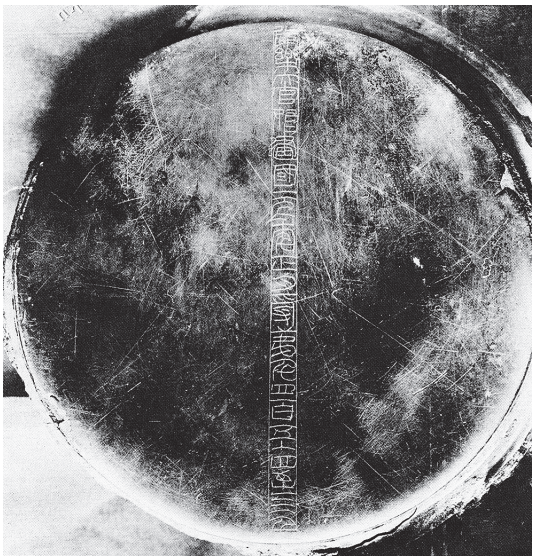

図８　楽浪漆器：盤シリアルナンバー

楽浪古墳出土始建国元年夾紵漆器盤：王莽紀年漆器
梅原末治『支那漢代紀年銘漆器図説』桑名文星堂，1943 年，より転載。

らかにしている。中央工官の漆器は少府の管轄に係る宮廷専用の什器である。また，楽浪漆器に数多登場する蜀郡西工や広漢郡工は地方の工官であるが，いずれにせよ官営工房であり，その管理体制の中で制作された什器である。図８のように官発行のシリアルナンバーと解釈できる銘文も存在する。ここではその機構や管理体制に係る議論については紙幅の関係で割愛するが，このような什器は宮廷内での使用に供されるべきものであって，楽浪の地方官僚が如何に富裕であるといえども容易に入手できる器物ではない。この疑点について，町田章は楽浪資料の大多数が王莽に係る時期に属することから漢王朝退廃の過程で王莽が行った撫恤政策の一環であるとし，谷豊信はこれに加えて楽浪王氏の富裕さも指摘している[27]。然るに，楽浪に大量に存在する事由はさておき，中央管制の下で制作された漆器は，最初から埋葬のためのみに供すべく制作された器物，すなわち，明器ではなく，高級官僚層専用の什器として彼らが実生活の場で使用するものであった。そして，海昏侯や長沙漁陽の墓葬より出土する膨大な数量の漆器については如何にとらえるべきかというに，身近なところで大切に使用された什器として，別の世界でもその使用に供すべき随伴什器として副葬されたものと考えるべきである。その意味において漆器数量の夥多は漢代の厚葬の一環であり，ある意味，明器が求められた方向性の一環である薄葬とは，正に対極に位置する葬送方式の姿であると理解すべきである。

なお，楽浪墓群の調査は３期に分けて実施された（第１期：1909～14 年，第２期：1916～1925 年，第３期：1930～1943 年）[28]。この楽浪墓群に関する研究文献は枚挙に暇ない。しかしながら，漆器に関する研究はというに，中国側研究者の資料紹介はみられるもののこれを専題とする研究成果は管見の範囲では見当たらず，日本における個別研究も希少である。このような状況のなか，近年，楽浪漆器の研究状況と収蔵状況を収録した樋口豊郎編の『楽浪漆器 ── 東アジアの文化をつなぐ漢の漆工器 ──』[29] が刊行された。然るに，「はじめに」の中で「美術と考古学」という視点が提示されているように，楽浪発掘に係る考古研究史，並びに収蔵品の変遷と美術史的研究概要が纏められているにすぎず，楽浪出土考古学資料の再検討がなされているわけではない。むしろこの点が重要で，近年中国漢代漆器研究者がその研究の中で必ず引用している楽浪出土漆器資料について，日本の研究者でこれに言及するものがない点はまことに奇妙であり，遺憾なことでもある。この場でその資料について言及する余地はないが，本論を纏める段階で収集したその資料を概観するに，楽浪出土漆器は中国漢代漆器の研究に欠くべからざるものであり，まさに現在必要とされるべき資料であることを再認識させられた。今後を期す課題であることは言を俟たない[30]。

漆器はその高級産品としての性格ゆえに漆器の出土する墓葬は特定されてくるのであり，埋葬される地域の環境という要素以上にその被葬者の性格が副葬品を規定しているという結論が導かれるのである[31]。いずれにせよ，王族や高級官僚の什器として，彼らの生活環境の中に供される性格のものであるから，その制作工程や流通に関する

図 9-1　楽浪漆器：耳杯

楽浪古墳出土元始四年金銅釦漆耳杯
梅原末治『支那漢代紀年銘漆器図説』桑名文星堂，1943年，より転載。

図 9-2　海昏侯出土漆耳杯底部針刻

「江西南昌西漢海昏侯劉賀墓出土漆木器」『文物』2018年第11期より転載

管理は厳格なものであり，葬祭に供することを専らの目的として作成されるようなもの，すなわち明器として作成されるようなものではない。墓葬より出土する漆器については，南昌海昏侯漢墓や長沙望城坡前漢漁陽墓などの出土状況に即して考えるならば，生前の生活において身近で用いた随伴什器として副葬されたものとみるべきであろう。その意味では漢代の厚葬の一環であり，明器登場の方向性に係る薄葬とはまさしく対極にあるものと理解すべきである。この葬祭をめぐる議論に発展するであろう問題として，先に海昏侯の出土状況のところでも取り上げたが，中国全土で出土する漆器，特に耳杯の底部の記銘方法が複数存在する点について最後に触れておきたい。すなわち，図9にみるように，①底部の周囲に針刻で細かな文字を規則的に刻むもの（図9-1），②底部に針刻で乱雑かつ比較的に大きな文字を刻むもの（図9-2），③底部あるいは内部に朱・黒漆で比較的優美な文字を記すもの，という文字の書き方が確認できるのである（押印もあるが書法ではないためこの場では除く）。①については工房の管理機構・工人の職分など，②は「御酒杯」など，③は個人名などが主な内容である。特に②については「御」という対象が示されているにもかかわらず，裏面とはいえあまりにも乱雑な文字であることから，生前において使用された状況を埋葬あるいは遺品の整理にあたって記録として残したもの，という解釈も可能なのではないだろうか。今後を期す問題として注意を向けていきたい。

まとめ

山東日照漢墓にて漆耳杯と陶質耳杯との若干の重複がみられる以外，馬王堆漢墓，海昏侯漢墓，長沙魚陽漢墓，揚州広陵漢墓など大量に漆耳杯を出土している墓葬からの陶質耳杯の出土はみられない。したがって，厚葬の風が浸透していた漢代にあって，皇族や王族をはじめとする貴族層は死

後の世界でも継続的に生前と同様な生活が営めるようにとの希望を込めて日常の使用に供していた高級産品である漆器，しかも相当数量の器物を副葬していたと理解することができる。

では，これまでに筆者が目にしてきた膨大な数量の陶制（青磁を含む）耳杯などの器物をどのようにとらえるべきであろうか。出土状況から見えてくる漆器という産品は，そこに記された銘文からも分かるように高級貴族の使用に供される公の行政・工房組織による管理の厳格な高級産品であり，中下級の貴族官僚などが容易に入手できる代物ではなかった。当然にして模倣品が登場することになる。すなわち陶質の耳杯などは高級漆器を模して制作された産品にほかならず，それはまさしく明器という認識においてとらえることができるものである。一方，揚州平山郷万維工地漢墓出土の小型漆耳杯，漆案，漆勺について，筆者が当初これを目にしたときは，これこそ明器として制作された漆器であると考えた。しかしながら，以上のような理解に立つとき，小型の模型であるとはいえ，漆器であることに相違なく，当然にしてその製作は漢代の厳格な生産管理工程の中に組み込まれていた産品と理解すべきである。換言するならば，模型のような小型漆器は漢代の王侯階級が実生活の中で愛好した高級玩具としてとらえるべきものといえよう。

漆器は明器か否か，という議論はきっちりとした認識のもとでなされてきたのであろうか。本論では敢えてこの認識の共有を求めた。この認識を明確にしたことにより，漆器が実生活の場（特に皇帝王侯貴族であるが）に存在したものであることは理解される。かかる点は，銅器などよりも日常生活に近い環境を捉えることができるという点において，社会文化を考える上に卓越した研究資料となり得るものである。

本論は法政大学大学院中国古代物質文化研究所と復旦大学文物與博物館系との協同研究の題目として設定した中国古代漆器研究プロジェクトにおける研究成果の一部であり，2018 年度の在外研究中に収集，見聞した資料に基づいた内容を記したものである。従来の文物研究については，金銀器や青銅器といった金属器，陶質土器や青磁・白磁，三彩といった陶磁器，さらには玉器に対する注目度は高く，枚挙に暇がないほど多くの研究が行われてきた。然れども，古代漆器については，その出土資料の少なさと相まって注目される機会は決して多いとはいえず，研究成果も十分なものではなかった。しかし，近年飛躍的に増加した出土資料の多さに加え，本論で言及したごとく実生活に係る産品であるという理解が成り立つため，古代社会の復元という点において欠くべからざる研究対象であることを改めて認識しなければならない。

図録

博物館や考古隊の内部に収蔵されている資料は研究活動に供されることを目的に閲覧が許可されたものである（撮影も許可された）。しかしながら，公表とはまた別の問題であることから，本論では博物館の一般展示や研究図録に所載されている，所謂パブリックなものとして認識されるものに限って掲載している。

注

（1）　王巍総主編『中国考古学大辞典』上海辞書出版社，2014 年，40 頁。

（2）　原田淑人「支那杯の器形と用途とに就いて」『民族』第 2 巻第 6 号，1927 年，『東亜古文化研究』座右寶刊行会，1940 年，所収。

（3）　広西や貴州などの南方地域でも漆器を出土する墓葬の事例は知られているが，紙幅の都合上割愛した。「広西貴県羅泊湾一号墓発掘簡報」『文物』1978 年第 9 期，「広西合浦西漢木槨墓」『考古』1972 年第 5 期，「貴州清鎮平壩漢墓発掘報告」『考古学報』1959 年第 1 期。

漢墓より出土した漆器群の分類については陳振裕が前漢までであるがその時期を前後二期に分け，それぞれを墓葬の規模により甲乙丙丁戊己の六類型に分けて詳細に分析し，さらにその分類区分に基づいて出土状況にも触れているが，編年および分類区分に係る議論については，本論の方向性とは懸け離れていることから割愛する。陳振裕『戦国秦漢漆器研究』文物出版社，2006 年。

（4）　湖南省博物館・湖南省文物考古研究所『長沙馬王堆一号漢墓』上・下，文物出版社，1973 年，湖南省博物館・中国科学院考古研究所「長沙馬王

堆二, 三号漢墓発掘簡報」『文物』1974年第7期, 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所『長沙馬王堆二, 三号漢墓』文物出版社, 2004年, 第一巻「田野考古発掘報告」, 何介鈞『馬王堆漢墓』文物出版社, 2004年。

(5) 長沙文化局文物組「長沙咸嘉湖西漢曹墉墓」『文物』1979年第3期, 湖北省博物館「象鼻嘴一号漢墓」『考古学報』1981年第1期。「長沙砂子塘西漢墓発掘簡報」『文物』1963年第2期, 「長沙湯家嶺西漢墓清理報告」『考古』1966年第4期, 「長沙又発現一座西漢大型木郭墓」『文物』1979年第3期。

(6) 長沙市文物考古研究所・長沙簡牘博物館「湖南長沙望城坡西漢漁陽墓発掘簡報」『文物』2010年第4期。本文では割愛したが, 副葬品の半数が漆器（150余点, その大半が乾漆）であり, 陶質器物は数点という曹嬢墓も本論の議論の範疇でとらえることができる。長沙市文化局文物組「長沙咸家湖西漢曹嬢墓」『文物』1979年第3期。

(7) 長江流域第二期文物考古工作人員訓練班「湖北江陵鳳凰山西漢墓発掘簡報」『文物』1974年第6期, 紀南城鳳凰山一六八号漢墓発掘整理組「湖北江陵鳳凰山一六八号漢墓発掘簡報」『文物』1975年第9期, 一六七号漢墓発掘整理小組「江陵鳳凰山一六七号漢墓発掘簡報」『文物』1976年第10期, 湖北省博物館「光化五座墳西漢墓」『考古学報』1976年第2期, 湖北省博物館『秦漢漆器――長江中游的髹漆芸術』文物出版社, 2007年。

(8) 一六七号漢墓発掘整理小組「江陵鳳凰山一六七号漢墓発掘簡報」前掲注(7)。

(9) 紀南城鳳凰山一六八号漢墓発掘整理組「湖北江陵鳳凰山一六八号漢墓発掘簡報」前掲注(7)。

(10) 長江流域第二期文物考古工作人員訓練班「湖北江陵鳳凰山西漢墓発掘簡報」前掲注(7)。

(11) 陳振裕「湖北秦漢漆器芸術総述」『戦国秦漢漆器群研究』前掲注(3)。呂静「耳杯及其功用新考」『湖南省博物館館刊』第14輯, 2019年。

(12) 孫機「関于漢代漆器的幾個問題」『文物』2004年第12期, 『漢代物質文化資料図説』上海古籍出版社, 2008年, 所収。

(13) 揚州博物館『漢広陵国漆器』文物出版社, 2004年。王子堯・靳褘慶・楊暉「漢広陵国之漆耳杯」『“中国漆器文化研究的回顧與展望”学術研討会論文集』浙江省博物館, 2017年。

(14) 南京博物院盱眙県文広新局「江蘇盱眙大雲山江都王陵二号墓発掘簡報」『文物』2013年第1期。

(15) 安徽省文物工作隊「阜陽双古堆西漢汝陰侯墓発掘簡報」『文物』1978年第8期, 「安徽天長県漢墓的発掘」『考古』1979年第4期。

(16) 安徽省文物考古研究所・馬鞍山市文化局「安徽馬鞍山東呉朱然墓発掘簡報」『文物』1986年第3期, 馬鞍山市文物管理所「安徽省馬鞍山市東呉朱然家族墓発掘簡報」『東南文化』2007年第6期。

(17) 徐州漢楚王陵の漆器出土品として注目されるものに漆砂硯がある。文具の一種として筆者も砂硯の存在は認知していたが, それが漆器において確認されたことは極めて有意義である。改めて別稿を期したい。鄒厚本主編『江蘇考古五十年』南京出版社, 2000年, 253頁。

(18) 山東省博物館・臨沂文物組「臨沂銀雀山四座西漢墓葬」『考古』1975年第6期, 銀雀山漢墓発掘隊「臨沂銀雀山西漢墓発掘簡報」『文物』2000年第11期, 臨沂金雀山発掘組「山東臨沂金雀山九号漢墓発掘簡報」『文物』1977年第11期。呂健「山東博物館蔵臨沂銀雀山西漢墓出土漆器考議」『“中国漆器文化研究的回顧與展望”学術研討会論文集』前掲注(13)。

(19) 山東省文物考古研究所「山東日照海曲西漢墓（M106）発掘簡報」『文物』2010年第1期。

(20) 青島市文物保護考古研究所・青島市黄島区博物館『琅琊墩式封土墓』科学出版社, 2018年。

(21) 濱田耕作『支那古明器泥象図説総論』1927年, 『濱田耕作著作集第3巻』, 1989年, 所収。京大東洋史辞典編纂会編『新編東洋史辞典』東京創元社, 1980年, 『世界考古学辞典』平凡社, 1979年, 関野雄。

(22) 『世界考古学体系』（第7巻, 東アジアⅢ, 漢・南北朝・唐時代, 平凡社, 1959年, 44-57頁, 岡崎敬。

(23) 漆を塗装用品, すなわちペイントとしての性格で考えるとき, 明らかに葬送用の明器たる木器, 陶器にも漆は髹される。これを漆用品として扱うか否か。むしろ分けたほうが理解しやすい。なお, 本文中では触れなかったが, 本論で取り上げた木棺のほぼすべてが漆棺である。漢代の漆棺については別稿を期す。

(24) 中国硅酸塩学会『中国陶磁通史』第3章「戦国・秦・漢時代の陶磁」平凡社, 1991年, 98-99頁。

(25) 漢代に官営漆工業の中で生み出されたものは往々にして産地の名称が記されている。これに対し, 私営の漆工業も存在したことはその出土品から理解されるところであるが, それらは産地の名称を記さず専ら私人工房の名称などが記されている。そして, 出土状況からみるならば, その数量と品質において, 私営工房は官営工房にはるかに及ばないことが理解されるのである。張理萌「漢代漆器初探」『故宮博物院院刊』1989年第3期,

27 頁。

(26) 梅原末治『支那漢代紀年銘漆器図説』桑名文星堂，1943 年，佐藤武敏「中国古代の漆器工業」『中国古代工業史の研究』吉川弘文間館，1962 年，町田章「漢代紀年銘漆器聚成」『古代東アジアの装飾墓』同朋社，1987 年。

(27) 町田章「漢代紀年銘漆器聚成」前掲注(26)，47-49 頁，谷豊信「日本に残る楽浪漆器 ── 楽浪出土品と楽浪研究史の概観 ──」『楽浪漆器 ── 東アジアの文化をつなぐ漢の漆工器 ──』美学出版，2012 年，222-224 頁。

(28) 鄭仁盛「韓国考古学者の視点から見た植民地楽浪考古学」『楽浪漆器 ── 東アジアの文化をつなぐ漢の漆工器 ──』前掲注(27)。

(29) 樋口豊郎編『楽浪漆器 ── 東アジアの文化をつなぐ漢の漆工器 ──』前掲注(27)。

(30) 孫機は楽浪出土漆器の資料的な重要性を認識している一人である（「関于漢代漆器的幾個問題」前掲注(12)）。昨今，楽浪漆器資料の再検討を提唱する研究も現れた（施宇莉「楽浪漆篋図像所見漢代礼俗」礼学与中国伝統文化国際学術研討会，2018 年 11 月，武漢大学）。大きな問題提起として受け入れるべき方向性であるといえよう。なお，楽浪漆器に止まらず，日本国内での近年の中国古代漆器研究の状況は，関連する研究成果を上げるに片手にも満たない（本論の議論に係るものはなく記載は略す）というまことにお粗末この上ない状況である。

(31) 町田章「漢代紀年銘漆器聚成」前掲注(26)。

On the Study of Han Period Lacquer Container 汉代漆器 ware through the Excavated Situation:
The Lacquer Container 漆器（Special Container Erbei 耳杯）ware was a Burial Imitation MingQi 明器 or not.

Hirohito SHIOZAWA

Abstract

This paper is a part of the study on the sabbatical 2018, and a part of the collaboration with the University Fudan 复旦大学 in Shanghai. We will develop a discussion to the teama of Han period lacquer container with study of the new excavation of tombs of Han period, Mawangduihanmu 马王堆汉墓, Haihunhouhanmu 海昏侯汉墓, Yuyanghanmu 渔阳汉墓, Fenghuangshanhanmu 凤凰山汉墓, Guanglingwanghanmu 广陵王汉墓, Dayunshanhanmu 大云山汉墓, Rizhaohanmu 日照汉墓, Dutunhanmu 土屯汉墓 in China and think that the lacquer container 漆器（special container ErBei 耳杯）ware was a burial imitation MingQi 明器 or not. Besides, with the data of the Lelang lacquer container 乐浪漆器 we will find a clue to the solution to the problem that the lacquer container 漆器 is the exclusive goods equal to the bronze container 铜器. We hope that our study will contribute to solving the problem for Han period lacquer container 汉代漆器.

Keywords：Han period, lacquer container, burial imitation